

平成25年度 岐阜県口蹄疫防疫演習

平成25年度口蹄疫防疫演習（主催：岐阜県、共催：一般社団法人岐阜県畜産協会・中濃地域口蹄疫現地対策本部）を、平成26年1月15日（水）、可児市の岐阜県農業大学校で開催しました。地元市町村や関係団体に加えて県内、近隣県から総勢214名の参加がありました。

午前は、宮崎県川南町から押川義光先生をお招きし、ご講演いただきました。午後は、万一の口蹄疫発生の際実施される初動防疫措置について説明後、関係職員により、集合場所での作業から農場での作業終了までの一連の流れについて演習を行いました。さらには、農場における日常から必要な防疫対応について、畜産農家の皆さんの参加により実動演習を行いました。

平成22年の宮崎県での発生から、3年半が経過し、国内での口蹄疫の発生はありませんが、アジア近隣諸国をはじめ世界各地では発生が相次いでおり、国内での発生は予断を許さない状況です。今後の発生がないことを願いながらも、いざという時に備え緊張感を高めるべく、演習を進めました。

講演

「宮崎県における口蹄疫発生現場での対応について」として、宮崎県川南町農林水産課の押川義光課長から、発生現場での大変貴重な事例を詳細にお話いただきました。

町の対策本部での陣頭指揮のご経験を踏まえ、口蹄疫対策に必要な事柄、心構え等、詳細にかつ分かりやすくご説明いただき、改めて口蹄疫対策の重要性を再認識できました。



実動演習 1

最初に、口蹄疫の発生を想定し、口蹄疫の特徴、発生農場での対応や、防疫スケジュール、殺処分や埋却の方法等、一連の初動防疫の概要について、中濃家畜保健衛生所職員から説明しました。



この後、防疫作業従事者が実施する、集合場所に集まり農場サポート基地に移動するまでの実際の作業について、関係機関の皆様に参加により行いました。

集合場所では、体調に問題ないか確認した後、農場へ持ち込めない手荷物を係員に預け、防護服を装着します。防護服を着ることにより、外見では誰だか判別しにくいため、防護服にはあらかじめ自分の名前等を大きく書いてから、防護服を装着します。



次に、舞台をグラウンドに移し、農場での防疫作業の演習を行いました。サポート基地、農場、埋却地をグラウンド上に想定しています。

防疫従事者が農場に到着する前に、家畜防疫員らが農場の緊急消毒を行っています。



農場前のサポート基地に到着した防疫従事者は、自身の体にウイルスが付着しないよう、厳重に防護服等を装着します。防護服と長靴との隙間をガムテープで覆うのは、介助者に手伝ってもらいます。農場では石灰を用いて作業することもあり、目に石灰が入らないよう、ゴーグルも装着する必要があります。

牛を殺処分した後は、埋却場に向けて、牛や汚染物品を輸送します。牛は重いので、クレーン等重機を用います。一つ一つの作業は、ウイルスの拡散を防止しつつ、作業は安全に進めることを忘れてはなりません。



埋却溝に入れられた牛等は、石灰で十分に消毒し、埋却されます。
なお、牛は、リアリティを追及した等身大の模型を作成し使用しています。

農場での作業を終えた従事者は、全身を十分に消毒してから、防護服を脱ぐことができます。ウイルスの農場外への持ち出しは許されません。



演習に参加された方からは、実際の作業を目の当たりにし、もし口蹄疫が発生したらすごいことになってしまう、と驚きの声が上がりました。

実動演習 2

主に畜産農家及び農場に出入りする関係者を対象として実施しました。

農場での飼養衛生管理基準の遵守は、発生防止の重要な対策です。

口蹄疫が発生していない日常においても、農場出入り車輛の消毒や、農場へ立ち入る人への対策が重要であることを、確認しました。

農場に出入りする車輛の消毒用に、今回は廉価で、扱いやすい電動ポンプ式の消毒器を、実証展示を兼ね実演しました。使用する消毒器は、ホームセンターなどで2～3万円程度で販売している家庭用100V電源で動かすことができる園芸用の消毒器です。



タイヤには、汚れに見立てた消石灰が塗られています。しっかり消毒することにより、元の色のタイヤになります。

家畜保健衛生所職員のデモンストラーションの後、畜産農家の方にも実施をしていただきました。



み消毒槽及びブラシ等を設置するよう、展示を行いました。



また、農場の入口には、農場へ立ち入る人等のために、入場記録簿、手指消毒器、長靴または靴カバー、白衣、踏み込み消毒槽及びブラシ等を設置するよう、展示を行いました。

